

## 人権保育専門講座②

造形活動を通して自尊感情を高める

# 実践から学ぶ子どもの表現

～0歳からの実践を通して～



畿央大学 永渕 泰一郎さん

人権保育専門講座②は、「造形活動を通して自尊感情を高める」をテーマに、畿央大学の永渕 泰一郎さんからご講演いただきました。志摩、津、伊賀の3会場で、97名の方に参加をいただきました。

永渕さんからは、子どもの表現を引き出す保育のあり方について、絵画などの造形活動にまつわる具体例をもとにご講演いただき、子どもを尊重するための保育者としての姿勢を振り返る機会となりました。



\*\*\*\*\*

## 子どもの「表現」とは？

保育活動の子どもの「表現」といえば、どのようなことを思い浮かべますか？

そういわれると、絵を描く、ものをつくる、歌う、踊る、リトミック、劇あそび、言語表現…といったことをあげられるかと思います。しかし、子どもにとっての「表現」はそれだけではありません。子どもが行う表現活動は、実にさまざまで、すべての行動が「その子なりの表現」と言えます。例えば、「沈黙」もひとつの表現であると言えます。ちょっとした仕草やつぶやきなどもそうです。

子どもは、さまざまなものや人とかわり、諸感覚を働かせて目の前のものと向き合いながら、気づきや発見を得ています。そして、興味や関心をもった「好きなもの」を、子どもたちは自分のなかに取り込み、「表現」として表します。その「好きなもの」は、おとなの感覚では理解できないものもあります。おとなならばガラクタと思えるものが、子どもにとっては宝物になることはいっぱいありますよね。子どもがみている世界は、おとなとは違うのです。

さて、子どもは、様々な表現をする可能性を秘めています。かかわるおとなの接し方によって、また準備された環境によって、子どもの表現は大きく異なります。結論的なことを言えば、「おとなが自分の表現をみとめてくれている」と子どもが感じるような信頼関係が生じたときに、子どもは自分に自信をもち、自由に表現をはじめると思っています。つまり、子どもという存在を認め、いとおしくみつめているかどうかということです。子どもを表現者として信じ、子どもからおとなも学ぼうとしているかどうかです。これって、人権保育の原則ですよ。

人権保育では、「幼児の世界に共感しながら、成長・発達に合わせ、一人ひとりの子どもの思いを大切にすること」を大切にしてきました。このことは、「幼稚園教育要領」「保育所保育指針」「認定こども園教育・保育要領」でもきちんと示されています。



ところで、「子どものことを大切にした保育を」とよく言われますが、それはどのような保育をすすめることでしょうか。造形活動ならば、どのように取り組むことを言うのでしょうか。

## ●子どものことを大切にした保育 ～ 子どもの「表現」を引き出すために① ～ 「概念」にしばられない

これまで皆さんは「絵の描かせ方」を指導として考えてこられたのではないのでしょうか。今から行うことは逆転的な発想を求めます。

ここに子どもが描いた一枚の絵があります。この絵を見て、どんな子どもがこの絵を描いたのかを想像してください。あるデンマークの子どもが描いた絵で国際的なコンクールで入賞した作品です。赤一色で描かれている人物の絵です。私は、とある研修会でこの絵を受講者にみせました。そして「男の子が描いたか？女の子が描いたか？」と尋ねてみたのですが、女の子と答える人が多くいました。理由を聞いてみる「赤い絵の具を使っているから」ということでした。また、「何歳の子が描いたか？」と尋ねてみると、4歳ぐらい、という回答に集中しました。聞いてみると、「人物の目がグリグリとして目玉がないから」「手がおなか付近から出ているから」という理由でした。私が「この絵は実は国際コンクールの入賞作品で、絵を描いた子は、8歳の男の子なんですよ」と言うと驚く人が多かったですね。そのデンマークの子どもの作品は、赤一色で描いているにもかかわらず、見事なグラデーションで色を塗り分けています。色味を意識して自分で調整できる年齢であることがわかります。子どもは、髪は何色、肌は何色…といった決めつけにとらわれない自由な発想で表現をしているのです。



「おとなは、子どもに『カタチ』を求めすぎているなあ」と私は感じています。子どもの「表現」の可能性を押しつぶして、おとなの決めつけにしばって「カタチ」づくられた作品を描かせているようにみえます。そんなことをしていたら、子どもは「自分の絵」を失います。これって、子どもの人権を大切にしているとは言えないですね。

おとなに「表現」を「教えてもらう」のを待つような子どもにさせてはいけません。そうして育った子どもは、おとなに「せんせいって、こんな絵を描いて欲しいんでしょ」と顔色をうかがうようになってしまいます。そして悲しいことですが、子どもがおとなの決めつけにしばられて絵を描いていることに無自覚なおとなは多いですね。

おとなの決めつけについて、もう少し考えてみましょう。

「りんごの絵を描いてみましょう」と言われたら、みなさんどんなリンゴを描きますか？「自由に描いて」といくら言っても、なぜかおとなが描くリンゴの絵というのは、どこか似通ってしまうんですね。リンゴの形とか、光沢とか、葉っぱを付けてしまうところまで、不思議と似るのです。つまり、知らず知らずのうちに、発想が形式化しているのです。これが「概念」です。



子どもが描く絵は、おとなの概念にしばられていません。ところがおとなは、概念にしばられて子どもの絵をみるものだから、「△歳ではこれがかかせる」「×歳だしもっと細かくかいてほしい」というように捉えます。子どもの表現というものは、さまざまな色や形との、その瞬間でのあいによって生まれ



るものです。おとなはもっとこのことを尊重するべきだと思います。

## ●子どものことを大切にした保育 ～ 子どもの「表現」を引き出すために② ～ 子どもを信じる

保育者は、子どもの「表現」を引き出す役割があります。だから、保育者こそ、おとなの概念を崩さなければなりません。そのためにも、自分のなかにある概念に気づき、子どもたちの表現を素直に感じ取り、受け入れるよう努めなければなりません。



具体例で考えてみましょう。子どもが一色しか使わないで絵を描いたとします。すると「おや、どうしたんだろう？もしかしたら何かストレスがあるのかな？」などと考え、「どうしよう、このことを親に伝えようか」と心配する保育者がいます。しかし、心配するようなことでしょうか？もしかしたら、子どもが色を交換するのを忘れるくらい夢中になって絵を描いているのかもしれないよね。保育者は、徹底して子どもの表現を信じなければならぬと思います。

そもそも、みなさんは、子どもに絵を描かせることの目的は何だと捉えていますか？ みなさんには当てはまらないことだと思いますが、自分がきちんと保育した証拠を確かめたいがために子どもたちに絵を描かせようとする保育者がいるように感じています。保育者の思いどおりに、自分が気に入る絵を子どもたちに描かせるようなことは、あってはならないことです。ところが、子どもが描いた人物の体の一部がなかったりしたら「あれ？〇〇ちゃん、手がないよ、足がないよ、胴体がないよ」などと言って、「こうやって描くんだよ」と自分のイメージをみせてしまう保育者もいます。これって、子どもに「人間の姿はこうあるべき」という概念の刷り込みですよ。人権を考えるうえでも、大変問題のあることだと思います。



このようなおとなの先入観や決めつけをもって子どもの表現を評価してしまうと、子どもは表現する意欲をなくしてしまいます。子どもたちをよくみて、「その子」の表現を捉えたいものです。例えば、子どもが沈黙していたとします。この時「今この子は、何か集中をしているのではないかな。心のなかでどんなことを考えているのか知りたいな」と保育者が考えて声をかけると、その子どもの表現の引き出しを増やすことにつながるかもしれません。反対に、「この子、ずっと黙っていてだいじょうぶかな」とマイナス要素として捉えて声をかけてしまうと、その子どもの表現に対する意欲を阻害することにもなりかねません。子どもの内面を知ろうとしないことは、子どもにとってよくありません。子どもの内面を独自性としてみとめることで、子どもは次の行動への挑戦を始めます。

童謡「雀の学校」の歌詞に「雀の学校の先生は むちを振り振り チイパッパ 生徒の雀は輪になって お口をそろえて チイパッパ」というのがありますが、保育の現場はこのようなものではありませんよね。「めだかの学校」ですよ。 「だれが生徒か先生か…」です。子どもといっしょになって遊び、活動しながら表現活動にも取り組みたいものです。



## ●子どものことを大切にしたい保育 ～ 子どもの「表現」を引き出すために③ ～ 失敗も「学び」の一つ

海外の保育事例です。乳児が時計のカタログをながめていました。保育者は、その様子を見て、「私も時計をもっているよ」と自分の腕時計をみせました。その乳児は目を大きくして興味をもったことがうかがえました。そこで保育者は、腕時計をその子の耳にあてて、コチコチという音を聞かせました。すると、その乳児は何をしたと思います？ カタログの時計の写真に耳をあてたのです。きっと、「こっちもコチコチ？」と頭のなかで考えていたに違いありません。

子どもは、仮説をたててそれを実証しながら、いろいろなことを感じ、考えています。そして、間違ったり失敗したりしたことを、自分の宝にしていきます。カタログの写真に耳をあてた乳児に対して「聞こえるわけないやん」とあざ笑う人はいないと思います。子どもの場合は特にそうですが、失敗した経験が「成功」となるのです。すべて「〇（マル）」なのです。だから、失敗させないように先回りしてサポートしすぎることは、どうかと思います。

子どもは、何かできることをみつけたときに、何度もくり返しますよね。「もう一回」といって同じ体験を反復しながら、自分のものになっているのです。そうした反復から得られた確信が、子どもにとっての「自信」となります。反対に「うまくいったから次の活動に移りましょう」と一度きりで終わらせてしまう保育では、子どもは自信をつけることがなかなかできないでしょう。



## ●子どものことを大切にしたい保育 ～ 子どもの「表現」を引き出すために④ ～ 子どもに「選択」権がある保育

ここまでの話で、「子どもの思うがままに自由にさせればいいんだな」と思われる人もいるかもしれませんが、それは極論です。あくまでも保育は、保育者が「設定」したものであるべきだと考えています。子どもがしたいことを、「自由に」できるような環境をつくっているか（設定しているか）が大切です。そして、保育者の思うようになるものではない、という原則をもっと意識するべきだと考えています。指導案は、あくまでも「案」です。準備したとおりにならないものなのです。保育者のねらったことと、子どもの行動はズレて当然です。その都度、保育者は活動内容や環境を工夫して変えていけばいいのです。



事例で考えてみましょう。

「カタツムリの絵を描きましょう」と言ったのにスパゲティの絵を描きはじめて子どもがいました。その時、「違うでしょ、カタツムリ描こうね」と言いがちです。子どもが説明を理解していないと考えるからです。子どもにとっては日常生活に体験している「丸い紙（皿みたい）+ぐるぐるを描く＝スパゲッティ」はイメージしやすく、日常にいないカタツムリは、保育者の言うことを守らなければならないものです。そのために子どもの表現は全て同じ方向に向いてしまう。

別の事例です。「りんごの絵を描こう」ということで、赤い絵の具をいっぱい用意していたところ、一人の子どもが「赤はいやや。黄色で描きたい」と言いました。みなさんどうします？ その保育者は、「なぜ黄色だろう」と思いながらも絵の具を用意しました。すると子どもは喜んで黄

色を画用紙いっぱい塗り始めました。何度も何度も重ね塗りをしながら、なんと40分もかけて画用紙を黄色にしていきました。できあがった後にその子どもにきいてみたら「あのね、あかい(かわ)はきれいやねん。でも、ママはいつも(かわ)とってくれる。ママのきいろいりんごがだいすき!」と言ったのです。その子どもは40分間も、心の中で「お母さん大好き、お母さんありがとう」と思いながら黄色を塗っていたに違いありません。そう考えたら、もし「りんごは赤でしょ。せっかく赤色をいっぱい用意したんだから」と黄色を出さなければこの絵は生まれなかったのです。ここに「子どもを信じる」大切さがあるのです。

子どもの内面に共感できる保育者は、「入り口」をたくさん用意しています。子どもたちが選べる環境をつくり、子どもから求められたものをその場に応じて準備しなおすことが、生きた保育・生きた表現につながるのです。

## 表現活動をとおして子どもの自尊感情を育てる

自発的に体験したことの積み重ねによって、子どもたちは自分らしさを形成し、自尊感情を高めていきます。そのために、おとなの価値観を子どもに教えるのではなく、あそびのなかで子どもが自ら育とうとする力を信じ、子どもが自然発生的に表現活動を行うことができるような保育にしたいものです。具体的なポイントを数点あげてみたいと思います。

### すべてを受け入れてくれる空気をつくる

「ここでは自分のしたいことができる」と子どもが感じることができかどうか、ということです。このことを、「支持的風土をつくる」と言います。例えば、子どもの描いた作品をどんどん飾る、ということもそうでしょう。全員が描いた同じような絵をずらりと並べて壁に貼ってある教室がありますよね。そうした空間で子どもは「せんせいの言うとおりに描けたかどうか」という価値観にしばられてしまうかもしれません。一方で、無題でダイナミックな絵の具画など貼る教室では、うまい・へたではない「楽しそう」の価値観が広まり、子どもが次々と意欲をもって絵を描くのです。

### 指導の成果を焦らない

「どうやったらうまく絵を描かせ、失敗せず全員がつくれるか」といった方法だけを追ってはいけません。目の前の子どもの実態をみつめながら、柔軟な思考でかかわりたいものです。子どもの発見や気づきを大切にしたい保育をし、自由で個別な活動時間を保育のなかでおこなうようにします。

子どもによって、描きたいテーマが異なるのは当たり前です。「みんなで同じ絵を描く」をめざすではありません。「共通なのはテーマではなく画材」と考えるとよいでしょう。

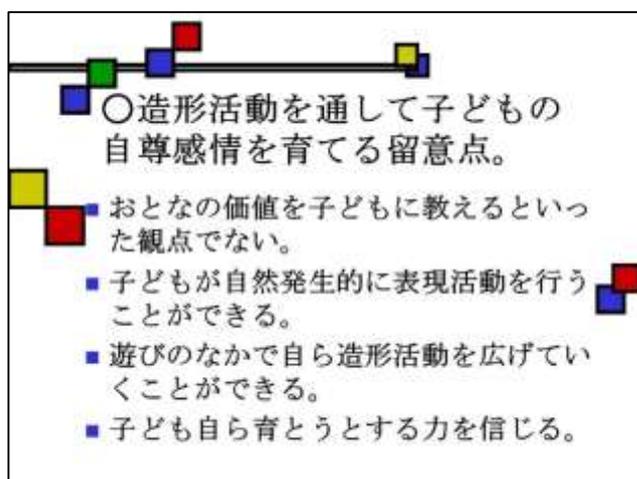
しかし、放任となっては趣旨と異なります。自由で個別な活動を保障するために、子どもたちを援助するという「指導」は必要です。

### 「あなたが大切」を伝える

表現活動は、子どもの内面の表出です。そのために、保育者は子どもから学ぶつもりで接するような、ヨコの関係になることが大切です。そのため、保育者は「子どもたちをどうみているか」と常に自分自身をみつめ、変えていくことが要求されています。子どものところに耳を傾けつづけるおとなの存在が、人権保育を考えるうえで重要なことなのです。

子どものことを信じるって本当に難しいことです。子どものしていることを信じようとしても、こちらの思いどおりになるようにしつつ先回りをして声かけをしたくなるものですね。

ポイントとなるのは、保育者が「子どもってすごいなあ」と感動できているかどうか、です。そのような子どもをみる姿勢が、子どもとの信頼関係をつくっていくのです。



○造形活動を通して子どもの自尊感情を育てる留意点。

- おとなの価値を子どもに教えるといった観点でない。
- 子どもが自然発生的に表現活動を行うことができる。
- 遊びのなかで自ら造形活動を広げていくことができる。
- 子ども自ら育とうとする力を信じる。

(永淵さんのレジュメより)

\*\*\*\*\*

## 参加者アンケートから

- 人権と表現をつなげた講演は、ほとんど聞いたことがなかったので、すごくおもしろかったです。
- 造形と人権保育がつながりました。普段から「させる」活動をしないよう気をつけて保育しているつもりですが、反省する点がたくさんありました…。
- ハッとさせられる内容ばかりでした。今までの保育を振り返り、「今、向き合っている子たちにどうかかわっていかうか…」と考えさせられました。
- 子どもが絵を描く時には、ある程度「形」になっているものにしないでほしい、絵を描き出す前に声かけをしていました。自分の都合で考えていたと思います。子どもを信じて、子どもを中心にしていきたいと思いました。
- 「子どもたちに保育士の見本をみせない」というお話に驚きました。見本がないと子どもが不安になると思っていましたが、子どもとしっかり話をし、子どものイメージをもっと自由にふくらませることが大切なのだと思います。
- お話を聞いて、私の保育はもしかしたら子どもたちと大きなズレがあったのかもしれない、と思いました。「うまくできた」と思っているのは私だけで、子どもたちからすれば「(先生に) うまく (あわせることが) できた」だけかもしれません。自分のなかの概念を子どもたちに押しつけていたのかなど、自分の保育を振り返り、ハッとしました。子どもたちが表現することを楽しいと感じられるような保育をしたいと思いました。
- 自分の描いた絵を友だちや教師にみられないように隠す子、「ぼくは下手だから描けない…」と言う子など、苦手意識をもっている子どもへのかかわり方に悩んでいました。しかし、今回のお話をきかせてもらい、私たち教師が目標を高くもちすぎているだろうか…その子の表現方法を尊重していないのではないだろうか…と反省しました。子どもたちから発信する表現を認め、伸ばしていけるようにかかわりたいです。
- 私は保育士になってまだ数ヶ月しかたっていません。自分は保育士に向いているのかと思うこともあります。今日のお話のなかで印象に残ったのは、子どもが保育者に「みてみて～」と来てくれるのは、保育者を信頼しているから、ということなんです。私はそれを聞いて嬉しくなりました。この気持ちを大切にしたいと思いました。

